ラファエッロ作《サン・シストの聖母》に関する一考察
――ピアチェンツァ、サン・シスト聖堂の壁面装飾を視野に入れて――

百合草真理子（名古屋大学）

イタリア、エミリア=ロマーニャ州の一都市ピアチェンツァのサン・シスト修道院附属聖堂主祭壇に設置されたラファエッロの《サン・シストの聖母》(1512-13年、現ドレスデン美術館蔵)は、盛期ルネサンスの傑作として、今日に至るまで様々な方向から議論されてきた。とりわけ近年の研究では、本作を近代芸術への転換点に位置づけたハンス・ベルティング(1990)の提起に対し、聖餐や典礼空間と密接に結びついた宗教的機能に光が当てられる(Prater 1991; Schwarz 2002)。しかし、従来の研究は、サン・シスト修道院が15世紀初頭にベネディクト会系改革派として新たに創設されたパドヴァのサンタ・ジュスティーナ修道会（後のカッシーノ会）に併合され(1425年)、その管轄の下、一定の指針に基づいて、他の北イタリアの修道院と共に聖堂の再建事業に着手したというコンテクストを考慮していないという点で再考の余地を残す。本修道院の場合、ラファエッロの祭壇画が1514年の献堂式に合わせて設置された後、1517年にレッジョ・エミリア地方出身のベルナルディーノ・ザッケッティによって聖堂壁面に装飾が施されている。本発表ではこの事実に着目し、以下の二つの方向から、サン・シスト聖堂の壁画・天井画との相互関係の中で《サン・シストの聖母》が担った意味と機能を考察する。

第一に、祭壇画との関係においてこれまで全く考慮されてこなかった、サン・シスト聖堂の図像プログラムに光を当てる。「イサクの犠牲」や旧約の預言、復活のキリスト像を用いて、キリストの犠牲や聖餐を暗示する西壁及び西交差廊天井画、さらに内陣障壁上の磔刑像との結びつきによって、《サン・シストの聖母》には、聖堂全体の図像プログラムのテーマである「救済史」における中心的位置が与えられたと理解される。この観点から、贖罪／受肉をめぐる本作の主題の再解釈を行うと同時に、同空間に置かれた他の視覚的要素と重なり合って、修道会独自の救済論が示された可能性を提案する。併せて、このテーマは、ポリローネのサン・ベネデット修道院など、15世紀末から16世紀初頭に改築された他のカッシーノ会建築の装飾とも共通することを指摘する。

第二に、宗教改革に対する同修道会の見解を視野に入れて、《サン・シストの聖母》と先行研究で論じられる「聖餐」との関係を考察する。考察の軸として、同じくカッシーノ会に所属し、ピアチェンツァのサン・シスト聖堂より少し遅れてコレッジョによって装飾が施されたパルマのサン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ修道院附属聖堂(1520-23年)の図像プログラムとの比較を据え、両都市とローマ教皇庁との結びつきを照らし出す。それにより、本作の注文に関わったと一部の研究者の間で推測されるカッシーノ会士グレゴリオ・コルテーゼと、ラファエッロ、教皇ユリウス二世との関係の一端を明らかにすることができるだろう。